GCOE Discussion Paper Series

Global COE Program

Human Behavior and Socioeconomic Dynamics

Discussion Paper No.216

1919-1929 年における北部イタリア絹織物業の輸出拡大

日野 真紀子

2011 年　9 月

GCOE Secretariat
Graduate School of Economics
OSAKA UNIVERSITY
1-7 Machikaneyama, Toyonaka, Osaka, 560-0043, Japan

1919-1929 年における北部イタリア絹織物業の輸出拡大*

大阪大学大学院経済学研究科博士後期課程

日野　真紀子

dg019hm@mail2.econ.osaka-u.ac.jp

【要旨】

本稿では，第一次世界大戦後から 1920 年代に起こったコモ地方を中心とした北部イタリアの絹織物業の輸出拡大，すなわちイタリア絹織物業が国際競争力を得るに至った過程を整理し，発展の形態を検討する。これまでの研究ではあまり強調されなかった，以下のような推移を明らかにする。

絹織物輸出拡大の背景には，1920 年代前半にかけて経営組織の近代化が確認される。この時期の絹織物業の発展は，織布関連産業を巻き込みつつ，織物業の製品・生産方法の開発・改良，新販路の開拓といった形で展開した。中でも 1920 年代前半から本格的に導入された新しい原材料である人絹糸の利用は急増し，絹織物製品の開発に関連する質的な変化をもたらした。人絹糸は絹織物業の主要原材料となり，新製品として大衆商品が製造されるようになり，同時に高級絹織物のデザインを改良しつつ，イタリア発の流行発信の試みを行った。1925 年のイギリスの保護関税をきっかけとして，イタリアは輸出市場を従来のヨーロッパ以外に求め，その後 1920 年代後半を中心に，新商品としての絹交織物など大衆商品の輸出が,アジアやアフリカ，南アメリカを中心に市場を拡大した。

JEL classification: N60, N64, N94

キーワード：イタリア経済史，絹織物，輸出，市場，流行

本稿は 2009 年 9 月に第 78 回社会経済史学会全国大会で報告した同名の論文に修正を加えたものである。本稿の執筆を支援してくださった全ての人に感謝を捧げたい。特に佐村明知先生，阿部武司先生，鳩沢歩先生，中島俊克先生には，多大なご教示とご支援を頂いた。中林真幸先生，山本千映先生からは有益な意見を頂いた。ミラノ大学への留学の機会を与えてくださった Giulio Sapelli 先生, Roberta Garruccio 先生，産業史について有益なコメントを頂いた Roberto Romano 先生に感謝を捧げる。但し，本文中の内容に関する一切の責任は著者によるものである。

†大阪大学大学院経済学研究科，博士後期課程

560-0043　大阪府豊中市待兼山町 1-7,　E-mail: dg019hm@mail2.econ.osaka-u.ac.jp

はじめに

イタリア戦間期経済の研究は近年，現地でも日本でも大きな進展を見せている。しかし，1930年以降国内産業企業の大半の株式を国が管理する形態をとる産業復興公社 (IRI)を形成する金融や重化学工業などの大企業に検討の偏りがみられ，繊維工業の評価が十分になされているとは言い難い。[1] 本稿はコモ地方の絹織物業を素材に，この空隙を埋めるひとつの試みである。

研究史の検討に入る前に，当該期イタリア絹織物業発展の概観を通じて，冒頭に述べた点がなぜ焦点となるのかを明らかにしておきたい。

ヨーロッパの代表的な絹織物産地として，フランスのリヨン，ドイツのクレフェルト，スイスのチューリッヒなどがあげられる。1913-18 年の間に，これらのヨーロッパの産地が戦争の影響を受けたため，イタリア，特にコモ地方の絹織物輸出は拡大した。しかし，戦後リヨンは良質な絹製品の生産力をいち早く回復し，1919 年のフランス絹織物生産額は 1918 年の二倍以上にのぼった。[2] 1917-19 年におけるイタリアの絹織物輸入元は圧倒的にフランスが占め（65-70%），[3] 輸出先はイギリスが主であった。戦前と戦後の輸出拡大の違いは，ヨーロッパの他産地が回復する中で，コモ地方は高級品製造の方策はなく，絹から人絹糸への素材転換を行いながら大衆商品を製造したことにある。人絹糸を利用することで絹織物と称しながら，大衆化した「絹織物」を提供した。

また後に触れるフランス高級純絹製品に対抗するイタリアの業界の動きは，大衆織物のデザインの改良にも影響し，流行のデザインの大衆商品は新市場の開拓に貢献した。ファッション史研究で近年，イタリアの流行は政策により創造されたものであり，1930 年代以降繊維工業全体に対する国策としてその重要さを増したが，その発端は 1920 年代に衰退し始めた養蚕と製糸業を再活性化するためであったことが指摘されている。[4] 一方，人絹利用を契機としたヨーロッパ外市場の開拓は，輸出先の需要や指向に合わせて生産組織を形成する産地の歴史として捉えることができる。

資源の乏しいイタリアにおいて，絹織物業は成長が見込める産業であった。それは原材料を国内で調達できる数少ない産業であったためである。[5]

絹織物輸出は，第一次世界大戦後の疲弊したイタリア経済の回復に大きく寄与した。[6] 生糸は戦前から重要輸出品であり，これを含む繊維製品輸出は，1922 年イタリアの全輸出額の約30-40%を占める。総輸出額の約 20%を占める生糸に次いで，絹織物は総輸出額の 4%を占める

輸出商品であった。[7] 表 1 に示されるように，イタリア総輸出額に対して絹織物製品の占める割合は,[8] 1921-25 年 3-5%，1927-29 年には 7%を超え，1920 年代を通じて大きな伸びをみせている。

このような輸出を支えた地域の歴史的な背景をみてみよう。イタリア北西部に位置するロンバルディア州はコモ地方と隣接商業都市である州都ミラノを含み，イタリア統一以前から絹産業の歴史を誇る。[9] 20 世紀初頭，ロンバルディア州は繊維製品生産が最も活発な地域であり，ロンバルディア州の 1911 年製造業生産額の合計約 9 億 300 万リラのうち約 1 億 9950 万リラを繊維生産が占めた。[10] 製糸業と撚糸業は主にミラノ県およびコモ県東部レッコに集中し，製織部門は，はじめミラノを中心に行われていたが次第にコモ地方へ移り，コモ地方が絹織物産地として広く認識されはじめるのは，19 世紀後半のことである。[11] 製造された織物の種類は中級品であり，絹紡糸，毛糸，綿糸等交織物が多く，高価な織物に向かうことはなかった。[12]

ここでイタリア国内におけるコモ地方へ絹織物企業の集中がどれほどであったかを示す。表 2 の 1923 年のデータから繰返しと整経 (コモ県 105 工場/イタリア国内 163 工場)，織物 (102/162)，仕上げ (20/29)，染色 (8/14)を併せると，製織工程のうち約 3 分の 2 の工場がコモに存在していた。[13] また，1921 年のコモ県全人口が約 45.6 万人であるのに対し，県内就業人口は約 25.2 万人 (48.4%)，そのうち商工業部門の就業人口は約 12.2 万人，さらにそのうち繊維産業に従事するものは約 5.2 万人 (20.6%) ，うち約 4.4 万人が女性 (繊維工業の 84.6%が女性)であった。[14] 以上のことからコモ地方の絹織物産業は国内，県内の基幹産業であったと考えることができる。

絹織物に関する関税改定で産地が大きな影響を受けたのは，1921 年と 1925 年である。1878 年からフランスとの関税改正が行われる中で，絹織物に関する関税の改定は取り残され，産地企業家の不満は大きくなっていた。その後 1921 年，フランスからの輸入絹織物を阻止するために，イタリアの絹織物業を有利にする輸入関税引き上げ交渉がはじまり，1923 年ようやく実現した。[15] この関税改定によって，フランスからの絹織物輸入額は 1920 年に約 1 億フランから 1923 年約 3300 万フランに減少した。[16] 次に影響を及ぼした関税改定は，1925 年のイギリスによる保護関税であった。このため，イタリアは，それまでイギリスの商社[17]を通じた市場に対して，より直接的な取引関係を持たなければならなくなった。[18] その結果，従来のヨーロッパ市場中心の輸出からアジアやアフリカへ市場開拓が進み，輸出量が急増した。後に詳述するが，その輸出拡大の背景には，1920 年代前半から並行して絹織物業における人絹糸利用の漸増があり，製品開発にも質的な変化をもたらした。

絹織物輸出拡大に触れた研究史は以下の通り整理できる。[19] 同時代の観察は，フリュッゲ

(Flügge) の指摘によると，英領インドや蘭領東インド等向け交織物輸出が増加し，1920 年代のイタリア絹織物業の発展をもたらした。[20] また，ショーバー (Schober)も，輸出量に比して輸出額が伸びず，イタリアは 1930 年以降生糸輸出よりも製品に含む生糸の比率を増加させて輸出に努めるだろうと予測した。[21] これらの観察は，当時の輸出の特徴を捉えているものの，輸出拡大の現象は何を示すものであったかの把握を欠くため，その後の経過からみて正確な予測を行いえていないという問題点がある。これに対し，戦間期におけるコモ地方絹織物輸出に関してカイッツィ(Caizzi)は，数量面では伸びたものの安価な絹織物が支配的であり，人絹織物その他を含む交織物生産を指向するようになったために価格面ではさほど伸びなかったことを指摘した。[22] しかし，この研究も輸出拡大の具体的な要因を明確に示唆していない。

近年，ガッリ(Galli) らは商工会議所に協力してコモの産業史研究を行った。国立コモ文書館の資料を用い，近年進展をみせたイタリア金融史研究の結果を踏まえ，戦間期前後を中心に，それまでの研究に欠けていた地域金融史を検討しながら，絹織物業，その他産業も含めたコモ地域全体の産業史を構築した。[23]

本稿は，コモ地方諸産業の発展を金融面から確認したガッリの成果を踏まえ，当該期イタリア絹織物業輸出拡大の背後にある生産体制の解釈を試み，輸出市場の拡大がどのようなプロセスを経て実現したのかを明らかにする。

分析に用いた史料は，国立コモ文書館の商工会議所資料，*Bollettino di Sericoltura*，*Silk*，*The Textile Recorder* などの同時代絹および織布関連専門雑誌，イギリス外国貿易統計，イタリア商業銀行統計である。これらに併せ，同時代研究者トレメッローニ，ロザスコの著作などを用い，[24] その他の期間と比して寡少である戦間期史料を補うために，絹織物業を経済史的視角から扱った二次史料も利用する。

作業手順は以下の通りである。まず 1920 年代前半に進展した会社組織の近代化を概観する。それとともに関連産業である織機技術の高度化がすすんだことを明らかにしながら，新素材である人絹糸が絹織物業にとっていかに重要な素材となったかを示す。新製品は，人絹糸と綿の交織物で，チュールやクレープ，交織ビロードなどの大衆商品であり，戦後直後から国内で提唱されていた「パリからイタリアに流行の中心を変える」というデザイン面を重視した流行発信の試みが国を挙げて行われていたことを確認する。最後にヨーロッパ市場中心の輸出から，ヨーロッパ以外の新しい市場の創出について考察をすすめる。

本文中の絹交織物は，経糸あるいは緯糸の中に絹（あるいは人絹）6%以上 12%未満の重量を含む織物と，経糸あるいは緯糸の中に絹（あるいは人絹）12%以上 50%未満の重量を含む織物

とに区分される。1921 年 7 月の関税項目の改定以降，統計は申告に基づくものとなった。[25] さらに 1930 年までイタリア政府の統計は人絹糸と絹の分類を明確に行っていないために，交織物に分類された製品の中には，人絹と綿やその他の繊維の組み合わせも考えられ，実際，史料の中にはそのような記述がみられる。

本稿は「絹織物業」と題しているが，これは，コモ地方は絹織物産地であること，また工業連盟(Unione Industriale)が絹織物業と分類した企業が主体であったためである。ここで示す絹織物，絹交織物とは，絹織物製造に区分された企業が製造した製品であり，人絹と綿を用いた製品を含む。また，資料の制約により，輸出入依存度と内需に関する記述が断片的であることを先に断っておく。

1. 第一次世界大戦後における絹織物業の近代化

1919 年 3 月から 1920 年 4 月の間，イタリア政府は通貨価値の下落を防ぐために，海外送金禁止，外国為替の利用制限など規制を連発した。これらの厳しい規制により，原材料である生糸の調達と，輸出入の際，外国との取引における支払いや代金の受取りが一時的に困難となった。[26] また，1919-22 年にかけて絹織物企業に対する税負担が重くなった。[27] このような状態にありながら 1922 年から絹織物輸出は拡大を遂げたが，そこに絹織物企業の株式会社化，織機技術の進歩，原材料の変化という要因を指摘することができる。以下それらを検討する。

1(1) 絹織物企業の株式会社化

戦後の資金不足の状態は，コモ地方においても例外ではなかった。銀行の貸付は高利だが，絹織物企業は原料調達に借入れを必要とする状態にあった。[28] 戦後，消費に対する期待の高まりから製造を拡大するために，企業は原材料の購入など流動資本の他，機械の設置や改良，工場拡張など設備投資向けの固定資本を導入する必要があった。

1910-20 年代に特にロンバルディア州全産業で，株式会社数が 1911 年に 788 社から 1927 年に 4,663 社へ顕著に増加した。株式会社の増加は，銀行側による融資先の役員兼務というドイツ型兼営銀行の役割を強調する文脈で語られることが多い。[29] 1922-25 年は国内の投資ブームで，銀行から企業に対して資金供給が円滑となった。[30]

家族経営が多かったコモの絹織物業企業も，1920 年代前半に，組織の変更へと向かい，その多くは株式会社へ転換をはかるか，もしくは増資などを行っている。[31] 絹織物業と関係が深いラ

リアーノ銀行の株式会社役員兼務数は繊維部門の中で 1911 年に 4 から 1927 年に 11 となり，株式会社が増加した。[32] 既に第一次世界大戦終戦前後に株式会社に転換する，もしくは増資を行った主な大企業は, FISAC 社 (Fabbriche Italiane Seterie A. Clerici), ベルナスコーニ絹織物社 (Tessiture Seriche Bernasconi), エジディオ・エ・ピオ・ガヴァッツィ社 (Egidio e Pio Gavazzi), アルフォンソ・ラダエッリ社 (Alfonso Radaelli), ブラゲンティ社 (Braghenti e C.)などで，これらはコモの絹織物有力企業であった。[33] タローニ社 (Industria Serica Taroni)も資本金 10 万リラから 300 万リラに増資し,[34] 新たにいくつかの有限会社の設立もみられた。[35] これらの有力企業は積極的に国外で販売努力をし，銀行はその経営を指導した。[36]

コモ地方の絹関連産業に出資したのはコモ人民銀行 (Popolare di Como), アンブロジアーノ銀行 (Banco Ambrosiano), アマーデオ銀行 (Banca Amadeo & C.), ラリアーノ銀行 (Banco Lariano)などの地域の金融機関が主であった。一方，国内主要銀行のひとつであるイタリア銀行 (Banca d'Italia)は製糸業に対して積極的な援助を行ったが，第一次世界大戦直後の国内主要大銀行は，一部の大企業を除いてコモ地方の絹織物業に対する出資には関心が薄かったようである。[37]

1(2) 織機技術の進歩

株式会社化の動きは設備の近代化という事実と並行している。製造設備をみると，生産拡大に向けコモ県内の織機数も増加した。[38] 表 3 に示されているように，1917 年と 1923 年の力織機と手織機を比較すると，力織機のみを設置する工場が大幅に増加した。1923 年には，コモ全体で 129 の織物工場が存在し，そのうちの 67 工場が力織機を設置していた。コモの工場の力織機は 1917 年 8,295 台（国内 12,869 台）から 1923 年 12,271 台（国内 18,121 台）に増加した。イタリア国内では電化が急速にすすみ，特にロンバルディア州とピエモンテ州は著しかった。コモ地方では 1900 年にコメンセ A. ヴォルタ電力会社 (Società elettrica comense A. Volta), 1921 年にコマチーナ水力発電会社 (Società idroelettrica comacina)が設立され，電化がすすんだ。[39]

絹織物業の発展は，コモ地方の機械工業も同時に発展させた。コモ県内における機械工業に従事する労働者は, 1921 年産業全体の 6.2% (繊維工業は 43.2%)であったが, 1927 年には 8.4% (繊維工業は 52.2%)に増加した。[40] コモの織機製造は，特に, 1919 年創業のカイローリ・フォンターナ・ランフランコーニ社 (Cairoli Fontana Lanfranconi), アルバーテ繊維関連機械製作所 (Officine per Macchine per Industria Tessile e Affini di Albate , 以下 OMITA 社と略)の 2 社に代表される。[41] OMITA 社は流行に応える織物を生産するために，1921 年，ミラノ見本市に力織機を展示, 1922 年リオ・デ・ジャネイロの国際展にも出展し, 1922-23 年 4 シャトル 4 色の織機, 7 シャ

トルの “pik-pik” を開発，販売に乗り出したように,[42] 積極的な事業展開を図った。OMITA 社は商工会議所宛に，絹織物だけではなく，機械工業に関する条約の改正を訴えた。織機販売の強力な競争相手であるドイツ，スイスの同業者と争うことが可能で，実際リヨンにおける織機販売が好感触であることを報告した上で，織機の輸出関税の引き下げを陳情している。[43] このように，織布機械生産の発展は著しいものであった。一方でコモ地方の絹織物業者は，スイスのベニンガー社 (Benninger)，ホネッガー社 (Honegger)，ルーティ社 (Rüti)からも安価な織機を輸入していた。[44] その後 OMITA 社は 1926 年にドビー織機を改良した新織機を発売し，1927 年には輸出用絨毯織の 7 シャトル織機，国内向けに生糸と人絹糸の薄生地用織機と，デザイン性に富む布地やネクタイ生地に向いた 6 色織りの織機を生産した。[45]

1927 年 5 月には，絹産地としてのアピールと，さらなる輸出拡大を目的として，コモ出身の物理学者アレッサンドロ・ヴォルタ(Alessandro VOLTA) 没後 100 周年を記念した「電気と絹の展示会」が開催された。[46] 展示物は，コモ産絹織物，繰糸機，撚糸機，蚕種，OMITA 社による織機が主であり,[47] 織機生産が地域を代表する産業のひとつとなり, 1920 年代に技術的な発展があったことがわかる。

1(3) 原材料の変化

このように次々と生み出される新しい織機技術発達の背景には，需要者側の要求があった。その要求とは，生糸から人絹糸へ原材料の変化にともなう新素材製品の期待である。戦後直後絹織物製造の注文は盛況であり，特にアメリカは日本とイタリア産の良質な生糸を買い占める勢いで，ヨーロッパでは生糸不足がおこっていた。[48]

図 1 に生糸と人絹糸価格の変動を示している。戦後直後の生糸価格の不安定さは，製糸業者だけではなく，絹織物業者にも影響を与えた。価格の変動幅が大きいために，イタリア銀行(Banca d’Italia)を中心とした政府機関である生糸取引中央局 (Ufficio Centrale per il Commercio Serico)が，価格暴落の際，製糸業に対して国内産生糸の買い上げを実行した。外貨獲得のために，生糸取引中央局は買い上げた生糸を原則輸出用とし，国内織布業者に対する生糸販売を二の次とした。このため，絹織物業者は生糸の値下がり時に国内で自由に購入することができず，織布業者と製糸業者の間に摩擦が起こった。[49] 1918 年，国内生糸価格の深刻な不安定さから，ダヴィデ・ベルナスコーニのような絹織物生産者は，「東洋の半製品価格がイタリアのそれの 3 分の 1 から約半分であるから，最低限の費用で，そして関税をかけずに日本産生糸を輸入することが必要だ」と語っている。[50] 1922 年，イタリアの日本からの生糸輸入は首位 (404.5t)であり，年によりばらつきがあるものの, 1924 年 (466.3t), 27 年 (228.8t), 28 年 (268.8t)において首

位であった。[51] このように，絹織物製造業者は購入に不便で割高な国内産生糸の調達に苦慮した。

1920 年代前半における人絹糸製造の拡大は，生糸不足の絹織物産地に影響を及ぼした。[52] 人絹糸製造は 19 世紀後半からヨーロッパで本格的に始まり，イタリア国内で生産が開始されていたが，1922 年の時点で，国内産人絹糸は国内需要を満たす程ではなかった。イタリア最大の人絹糸製造業者はトリノに拠点をおくズニア・ヴィスコーザ社 (Società Nazionale Industria Applicazione (SNIA) Viscosa)であった。イタリア・コートールズ社 (Courtaulds)と同じ製造工程をもち，生産量は一日で 14 トンといわれ，日産 20 トンの新工場建設と合わせて行われた増資は，イタリアの金融グループとフランスの人絹糸製造グループのジレ社 (Gillet)によって行われた。[53] 良質の人絹糸は輸出され，[54] 1923-24 年に国内産人絹生産量が急激に増加した。[55] 表 4 に示されているように，人絹糸の輸入量は，1924 年の 607.4 トンが最大であり，その後減少した。イタリアの人絹輸入先国は，1926 年までベルギーが圧倒的で，スイスが続いた。[56] イタリアに輸入された人絹糸は主にシャルドンネ特許式によるもので，特に靴下製造に使用された。1927 年に国内 16 社の人絹製造業者（うち 7 社が 1925 年に設立[57]）間で激しい競争と技術的な改良があり，高級糸を製造するまでに品質が向上した。[58] 同時にイギリスが保護関税を設けたため輸出用人絹糸の在庫が増加し，[59] 国内利用がすすんだ。

次に，生糸と人絹糸のコストを比較してみよう。1923 年に生糸価格は 405 リラ，人絹糸価格は 89.56 リラで，生糸の 4 分の 1 以下であった。[60] 1920 年代前半，国内産人絹糸は，生糸以上にコスト管理が容易で便利な糸であったが，まだこの時点では輸入人絹糸や生糸の品質のほうが良く，完全に人絹糸に代替することはなかった。[61] しかし 1924 年には，コモの絹織物製造で使用する原材料の 40-50%が人絹糸で占めるほど増加がみられ，[62] 国内販売で純絹織物を圧倒し，外国では販売が順調に伸びた。[63]

チュールやクレープをはじめ，絹織物とニット製品に人絹糸が利用され，大衆商品となった。純絹織物でショールを製造した場合 1,500 リラもするのに，30%ほど人絹糸を混ぜれば価格が 25%ほど安く供給できたことから，[64] 低価格商品の製造が促され，人絹糸の利用はますます増加する傾向にあった。

1926 年以降，生糸と人絹糸の価格は下落し続けた（図 1）。人絹糸価格下落の発端は，1927 年までイタリアが主に生産していた低品質人絹糸の国際競争激化にともない，国内人絹糸製造者は素早く高級糸の製造に切り替え，蓄積した在庫を一掃するために低質糸を過度な低価格で販売したことにある。1925 年イギリスの関税により販売先を失っていたイタリアは，アジア市場へ向

けダンピング輸出を開始し，それは折しも日本のダンピング輸出が始まる直前であった。[65] このように，国内外の人絹糸の在庫が溢れることで，人絹糸の価格は 1927 年以降徐々に値崩れを起こしていった。

国内で生産された人絹糸のうち, 60-65%は綿織物企業, 10-12%はニットと靴下企業, 28-30%は絹織物企業で利用された。[66] 1927-28 年にかけて，国内で製造された絹撚糸 220 万 kg のうち，国内絹織物業者が利用したのはわずか 10 分の 1 で，残りは輸出された。[67] コモ生糸倉庫検査所を経た織物製造用経糸は, 1922 年約 14 万 kg から 1927 年約 5.2 万 kg へ，緯糸は 1922 年約 7.7 万 kg から 1927 年約 1.2 万 kg へと減少しているように,[68] 絹織物業の中で生糸離れ，人絹糸採用の動きが進んでいたことがわかる。コモの絹織物業者は，1929 年に生産の 5 分の 4 を人絹糸で代替することを検討したが, 1920 年代を通じて生糸の使用は完全にはなくならなかった。[69]

次に原材料の変化によってもたらされた製品の変化について考察する。

2. 流行発信の試みと製品の多様化

1920 年代半ばに絹織物販売促進のために新製品情報や流行の発信の動きがめだったが，その動きは戦後直後から既に始まっていた。高級織物製造については，新たな取り組みとしてデザインに力を入れるとともに製品戦略において見直しを図り，同時に大衆製品の製造も影響を受け，デザインの改良がみられた。

デザインに関連して染色と捺染工程について少し触れておく。これらの工程は，製品多様化，消費市場のカスタマイズ能力や品質面で，役割は大きい。従来コモ地方は，技術的に困難な染色，捺染の工程を外国，特にフランスの企業に委託し, 1920 年前半において染色技術が遅れていた。[70] このため，市場に適合した製品として価値を高める必要から，これらの工程を国内で成長させることが重要であった。1920 年代半ばから染色業，仕上げ業者と織物業の間でファシスト工業総連盟を通じて業者間会議が何度も開かれ，緊密な連携をとるために，価格，割引や労働条件など具体的な解決策が話し合われた。[71]

1920 年代はデザイン性に優れた高級純絹織物製品への志向が生まれてきた時期であった。[72] 1919 年，流行の中心をフランスからイタリアにすることを目的に，イタリア政府主催の第一回国内衣料産業会議 (Primo Congresso Nazionale dell'Industria del Commercio dell'Abbigliamento) が開かれた。さらに二度目の会議を主催した雑誌編集者リディア・デ・リグオーロ (Lydia De

Liguoro)は，輸入品を貴重品として扱い，パリの流行をもてはやす国内の風潮に対して，輸入奢侈品の排除を主張し,[73] 国内のデザインや衣類を奨励した。[74]

1920 年にイタリアの絹織物輸入の大部分は，圧倒的に染色無地と加工生地 (21%)で，次いで紋織りレース・チュール (8.8%)が占めた。[75] 流行の織物はほとんどフランスからの輸入に頼り，1923 年の相手国はフランス (約 7200 万リラ)，次いでドイツ (約 2950 万リラ)，スイス (1350 万リラ)，イギリス (約 325 万リラ)の順であった。フランスは 1924-26 年も首位を保ち，主な輸入品は，ビロード，次いで一部絹のニットであった。高級品や流行の商品は，フランスから大きな影響を受け,[76] 1926-27 年においても高級純絹ビロードは依然として輸入に頼っていた。[77]

フランス高級製品に依存する絹織物業は，その状態を脱するためにデザインを改良し，デザイナーを育てることを試みた。コモのラヴァージ社 (Ravasi)が，デザイン性に優れた斬新な絹織物を発表したのもこの時期である。[78] コモではパリのオートクチュールの流行に対抗して，コモ国立絹織物専門学校と共同でデザイナーや芸術家を募り，イタリアから流行を発信しようと，デザインや新製品に関する企画を実行した。[79] イタリアの織物の独創性と素晴らしさをアピールするために，1927 年 5 月コモで開かれた展示会に，パリの有名なデザイナーであるポール・ポワレ (Paul Poiret)とウンベルト・ブルネッレスキ (Umberto Brunelleschi) を招待した。これは流行中心地であるパリのデザイナーにイタリアのデザインと織物の芸術性を認めさせることを狙ったものであった。[80]

一方，人絹糸を利用した交織物の製造が急増し，製品が大衆化した。[81] 1923-25 年の絹織物輸出増加は，特に純絹織物，交織物，ビロード，チュール・クレープで割合が増えたことが表 5 に示されている。さらに，製造する織物の種類が多様化し，傘生地，ネクタイ生地，交織物（サテンとポロネーズ）の製造に特化する企業もあらわれた。[82]

「大衆織物」は以下の 3 つに分類することができる。①従来の絹製品を人絹・他の素材を用いて模倣した廉価品として代表的なものは，チュール・クレープなどの薄地のものであり，②人絹・他の素材の特質や安価性ゆえに初めて可能となった多様な製品として，ビロードが挙げられる。③欧州外，特にアジアやアフリカなど綿・絹製品使用で長い伝統を持つ地域で，人絹利用によって始めて需要された製品（現地の模倣品）にダマスク織や綿繻子などである。

特に②のビロード製造について，輸出に占める割合はそれほど大きくないが，交織ビロードの輸出拡大は注目に値する。1920 年代の機械織ビロード生産は主にコモ地方で約 400 台の織機を用いて始まった。[83] その製造に人絹糸が用いられた。フランスのビロード生産は，イタリア産と比べて品質的に圧倒的優位にあったが，コモでもビロード用織機の開発が行われ，技術的な改

良が起こり，デザインにおいても徐々に評価を得ることができるようになっていった。[84] 1925 年になると 130 万メートルまで順調に総生産高を伸ばした。無地織の純絹ショールもほとんどがコモで生産され，年間生産は約2000万リラと推計される。それらは主にインドおよび中国向けのマントであった。[85] 交織ビロードの輸出は 1925 年から輸入を上回った。[86] 製造していた企業は主に，ファッブリカ・ヴェッルーティ社 (Fabbrica Velluti)，ペルケス・アルフレード・ラダエッリ社 (Peluches Alfredo Radaelli di Rancio)（この 2 社はのちに合併），ヴェッルーティ・ガスキ・バラッツォーニ・マズケッリ社 (Industria Nazionale Velluti Gaschi Barazzoni Mazzuchelli)，エドモンド・ゴッビ社 (Edmondo Gobbi)，ヴェッルーティ・カズナーティ社 (Velluti Casnati)であった。ビロード製品の用途は以下の通りである。広幅の絹ビロード，別珍（綿ビロードの通称）は，無地または模様入りでドレス・カーテン・室内装飾・その他に用いられた。絹ビロードの生産の多くが交織ビロードとフラシ天（ビロードの一種）であった。[87] コモのビロード製造業者は，国内販売先としてイタリアの鉄道車両の一等，二等のシートカバーも供給していたが，販路はもっぱら国外に依存した。[88]

その他，ミラノとコモでは，傘布地の生産も行われた。防水生地の傘布地製造は，技術的に難しく，織物業者と染色業者の職人の高い技術力と連携が要求される。他産地と比較して技術的に遅れていた染色工程の連携改善に伴い，傘地純絹織物は，1925 年に年間約 3500 万リラ生産され，そのうち約 1800 万リラ (約 51.4%)が輸出された。同年に傘地の絹綿交織物は 3700 万リラ生産され，そのうち 1400 万リラ (約 37.8%)が輸出された。[89] その他コモ県東部レッコ周辺では絹リボン，その他，広幅絹織物の大量生産もみられた。

また，捺染織物では，スカラ座で採用されたドレスが流行となり，世界各地の劇場でイタリアン・ファッションが流行した。流行していた広幅織はクレープなど薄手の後染めの織物で，厚地の絹織物は減少していたが，男性用服地と女性用ドレスの絹織物などは高品質を保ち，[90] イタリアの絹織物工場が，高級織物と大衆織物製品どちらについても，輸出先国の嗜好に適合する製品に多様化していったことが窺える。

表 5 から，1925-27 年に，統計上の 6-12%交織物は輸出量・輸出額と比較して，12-50%の交織物輸出量は，1925 年 1,609.1t から 1926 年 2,844.3t に顕著な増加を示しており，「新しい市場」に輸出された製品は，第三節で詳述するような現地製品を模倣した人絹と綿の交織物であった。1929 年まで 12-50%の交織物輸出量が増加したが，輸出額はほとんど増加しておらず，糸価格の下落とともに表 5 の重量単価の下落で示されるように，織物製品も値崩れし始めていた。

不況を迎えた 1928 年，コモ地方ではとりわけ大規模に織布製造を行う輸出企業が打撃を受けた。ベルナスコーニ社は，赤字が資本金の 15.5%に相当する 350 万リラに達し，FISAC 社

(Fabbriche Italiane di Seterie A. Clerici)も資金難に陥り，クニャスカ社 (Giuseppe Cugnasca)もウッジャーテとコモの工場を維持するためにパレの工場を閉鎖した。このような状況の中で耐え，販路を拡大した商品は，ラヴァージ社の織物，カルロ・ピアッティ社 (Carlo Piatti)のストールとショールのように，創造性を備えた芸術的な商品，つまり流行にのった狭義の純絹織物であり，[91] 大企業が大量製造する綿と人絹の交織品ではなかった。

3. 新市場の創出による輸出拡大

前節では，人絹糸を利用した製品の多様化を示した。ここで，特に顕著な輸出増加があった「交織物」が，1920 年代後半以降の絹織物輸出市場の変化に深く関連していたことを明らかにする。

先にイタリアの市場条件について述べておく。終戦直後のインフレはイタリアの輸出成長に有利に働いた。しかし，金本位制への復帰を目指して 1925 年から為替安定化のためのデフレ政策をとったにもかかわらず，リラの価値は下がり続け，1 ポンド=120 リラ前後の状況となる。ここから 1927 年 5 月に 1 ポンド=90.46 リラの新平価で金本位制に復帰したため，[92] イギリスやスイスに向けた輸出条件は厳しくなった。[93]

こうした市場環境の変化をふまえ，戦後から 1920 年代半ばまでヨーロッパ市場を中心とした輸出先，ヨーロッパ市場外に輸出先の変化がみられる 1925-27 年，輸出が顕著に拡大する 1927-29 年に時期を 3 つに分け，市場環境の変化，イタリアの業界の対応および輸出先順位の変化を辿る。

まず戦後から 1920 年代半ばにかけて，輸出先はヨーロッパ市場が中心であった。国交正常化により，ベルギー，続いてインド，エジプト，アルゼンチンとの関係も改善した。[94] また 1919 年に設立された，為替管理のための国立為替局 (Istituto Nazionale Cambi con Estero) によってスペイン向け輸出の取引準備も行われた。[95] しかし，戦前の主要な取引先であったオーストリア，ドイツ，ハンガリー向け輸出は，イタリアの通貨の不安定さから関係を結ぶことができず，チェコ＝スロバキア，ルーマニア，バルカン半島の国々は輸入制限を設け，[96] 戦後直後の輸出先は限られた。[97]

イタリアの絹織物業界は，勢いのあるアメリカ市場に販売網を広げたいと強く願った。[98] しかし，進出するには，アメリカが輸入制限しているサテンやネクタイ用生地，傘布地を販売する代わり

に，ブロケード（錦織），刺繍，装飾織物など 1 ヤード 6-8 ドルの商品で市場に入り込まなければ採算が合わず，[99] 結局アメリカ市場に積極的に参入できない状況にあった。[100] そのため，イタリアは輸出先として東欧やバルカン諸国も視野に入れる必要があった。[101] これらの努力にもかかわらずヨーロッパ市場が大きな比重を占め，1923 年の輸出価額ベースで依然として圧倒的にイギリス，次いでアルゼンチン，フランス，スイス，アメリカの順であった。[102]

次に，好況を呈していたコモ地方の絹織物業は 1925-27 年に大きな転換点をむかえる。1925 年 8 月，蔵相ヴォルピ (Volpi) がデフレ政策を開始し，不況の波が押し寄せた。[103] 国内需要の見通しが暗く，絹織物の販売市場は今まで以上に国外へと向かわざるを得なくなった。1925-27 年の国内繊維工業全体の成長率は-5.9%であったが，[104] 絹織物業はヨーロッパ以外の市場で販売努力をしたため，輸出増加と市場の拡大がみられた。

ヨーロッパ市場向け絹織物の輸出拡大は難しい情勢となっていた。絹織物企業に不安を与えたのは，[105] イギリスの金本位制復帰にともない 1925 年 4 月に通告され，同年 7 月 1 日に施行された絹製品に対する 33%という高率の従価税であった。[106] また，フランスは通貨切下げを行い，イギリスからの注文だけではなく，他国からの注文もフランスに流れた。[107] リヨン製品より低級品を主に製造するコモの絹織物業は製品に対する工夫と転換が一層必要とされ，結果的にますます大衆商品を製造する傾向が強まった。[108] その他，ドイツとオーストリアでイタリア製品の不買運動が起こり，特に絹織物の販売に影響したことをラヴァージ社が報告している。[109]

イタリアの業界側のヨーロッパ向け輸出困難に対する対応は以下の通りである。絹織物業者は新市場の研究に努めた結果，今までロンドンを通じて供給してきた国々と直接の取引関係を構築すべく，オーストラリアやカナダに直接輸出を開始し，[110] アジアとアフリカ向け輸出も急増した。さらに 1926 年，中小企業の支援策として，商品の見本陳列船を派遣して，南米や南アフリカ等への販路を拡大することを目的に輸出貿易振興策を行う国営輸出機関 (Istituto Nazionale per il Commercio Estero) が設置された。[111] このような国外へ積極的に販売を試みる努力は，その後も継続して行われた。

表 6 に示される 1925 年以後絹織物と交織物の輸出先の中で，主要輸出先ヨーロッパ諸国以外，ギリシャ，ルーマニア，トルコなどのヨーロッパ市場，ウルグアイなどの南米諸国，中国，タイ，海峡植民地などを含むアジア市場，ケニア，ウガンダ，南アフリカ，伊領アフリカ・占領地などを含む「その他」の項目が急増し，[112] イギリス以外の主要取引先を凌駕していることがわかる。[113] 純絹織物の項目では，アメリカ，英領インド，蘭領東インド，交織物の項目では，英領インドと蘭領東インド，エジプト，アルゼンチンの拡大が顕著であった。

最後に, 1927-29 年に輸出量が急増し, ヨーロッパ外の市場に変化が見られた。[114] 特に, 南米, インド, アジア, アフリカの市場に輸出拡大傾向が顕著であった。

輸出が拡大した市場で販売された具体的な製品は以下の通りである。特に輸出量の伸びが著しかった英領インドとの絹製品取引は, ボンベイとカルカッタ中心で行われ, 少数の輸入企業がこれを担い, 特に北部, 地方都市へ向けて商品を販売した。[115] インド向け輸出用織物のほとんどは主にインドの国内消費に利用され, 綿糸と生糸の鮮やかな色のダマスク織, または綿糸と人絹緯糸で織った花柄の綿繻子の需要が大きかった。蘭領東インド向け輸出製品であるイタリア産の人絹と綿の交織物は最下等品にあたり, [116] 1926-27 年の主な製品はファンシー物で, 平織または軽く刺繍が施してある薄い布地, 特に日本産生糸と綿糸と人絹で織った熱い気候に適したシフォンに需要があった。中国との取引は上海で行われ, 中国のパターンのダマスク織(朱子地の上に大柄な紋をあらわした紋織物, 緞子), 綿シュートの平繻子, 「リバティー」プリントの人絹サテンが人気であった。トルコとエジプトには全種類の織物が輸出され, 主な需要は, 特別な生糸と綿のダマスク織と両面が人絹と綿の交織ダマスク織, クッションカバー用の刺繍を施したものであった。[117]

このように, 輸出が伸びた地域における絹織物製品の売れ筋は, 生糸あるいは人絹糸と綿糸の組み合わせが多いことがわかる。

一方, 1928 年から 1929 年にかけて内需拡大に伴い, 絹織物大衆製品は国内販売にも向けられた。純人絹織物については, 1928 年 9 月までの 6 ヶ月間, イタリアの総生産 27,335,040 平方ヤードのうち, 輸出は 10,067,799 平方ヤード, 1929 年 9 月までの 6 ヶ月で, イタリアの総生産量 21,614,867 平方ヤードのうち, 6,276,657 平方ヤードを輸出しているといった数字からもわかるように,[118] 1928 年から 1929 年にかけて大衆商品は輸出以上に国内消費の傾向が強まった。

1928-29 年におけるイタリアの業界は, 引き続きヨーロッパ以外の市場を開拓することを主眼においている。織布輸出増加を目的として, ギリシャとトルコに使節団を送り, マーケティングを行うイタリア-東洋商業会議所 (Camera di Commercio Italo-Orientale) を設置した。[119] またスペインは南米諸国に影響力を持つことから, 1929 年に行われるバルセロナの展示会が重要視された。[120] このように新市場を開拓する手を緩めず, アルゼンチン向け輸送でイタリアの海運業は, より速度の速い新造汽船やモーター船を導入するなど改善を重ね, [121] その他の交通網の改善も輸出拡大を助けた。[122]

表 6 に示されているように, 1927-29 年に輸出量が急増した国は, 蘭領東インドとエジプト, 次いで英領インドである。絹交織物については, エジプト, モロッコ, アルゼンチン, アメリカ向け輸

出が顕著に拡大し，純絹織物では，英領インド，蘭領東インドへの輸出が急激に伸びた。

以上のことから，1920 年代後半に，主な輸出先であったヨーロッパ市場への危機感が契機となり，非ヨーロッパ絹織物製品市場への輸出拡大が起こったことを確認した。その市場は主に南アメリカやアジア，北アフリカであり，イタリアの絹織物企業が製造した各輸出市場に適合した製品，すなわち大衆商品である交織物，特に経糸あるいは緯糸に絹（あるいは人絹糸）12%以上 50%未満を含む交織物の伸びが大きかったのである。

おわりに

イタリアの絹織物業の発展について以下のことが言えよう。1920 年代後半の輸出が顕著に拡大したのは，綿と人絹の組み合わせを含む，現地製品を模倣した経糸あるいは緯糸に絹（あるいは人絹）12%以上 50%未満を含む交織物であった。これらの大衆製品がヨーロッパだけではなく，アジア，アフリカ，南アメリカなどの市場に拡大した。

その背景には，戦後から 1920 年代前半の株式会社の増加と力織機の増加による経営の近代化があった。さらに，生糸不足の状況も重なり，生糸の代替材として導入された人絹糸が，その後の絹織物業において非常に大きな比重を占める素材となった。 また戦後コモ地方に誕生した織機工業の発展が，純絹織物から大衆商品の交織人絹織物まで幅広い商品と大量生産を可能にした。なかでも交織ビロード製品は輸入品から輸出品に転じた。

一方，国内消費者の意識改革のため，イタリア絹織物業界は，コモ地方を中心として高級品純絹織物デザインに関連した流行発信を試みた。戦後直後からフランスの影響に対抗し，イタリアを流行の中心とすべく，デザイナーの育成や展覧会等が盛んに行われていたことは，その後の絹織物業，繊維工業全体の発展に繋がる動きとして注目すべき点であろう。このことは，「交織物」のデザインにも影響し，絹織物の輸出拡大を助けた。

1925-27 年にかけて，戦前から一貫して主要輸出先であったイギリス市場やその他のヨーロッパ市場に危機感を抱いたコモ地方の絹織物業は，販路の拡大に努め，世界各地の市場にそれぞれ適合した流行商品を供給し，輸出量を拡大していった。1927-29 年には，生糸と人絹糸価格が暴落し，続いて絹織物製品が値崩れし，安価な人絹糸の使用に拍車がかかるなかで，恐慌期を迎えることとなる。

人絹織物や交織物が優勢な中においてデザイン面が改良されつつあった純絹織物が完全に

消滅することはなかった。このことが 1930 年以後絹織物業にどのように影響したのか，今日まで続くコモ地方の絹織物業の重層性がいかに形成されたかを明らかにすることを今後の検討課題としたい。

戦後の為替変動や各国の関税賦課に翻弄されながらも，コモの絹織物業は輸出拡大の中で，織機製造や染色業といった関連産業を巻き込みながら，製品・生産方法の開発・改良や新販路の開拓といったイノベーション努力を重ね，その結果，当該時期に地域産業としての厚みが増したといえよう。

表1

1918-29年イタリア輸出額

年	イタリア輸出総額（百万リラ）	絹織物輸出（百万リラ）
1918		358.5
1919		305.1
1920		332.8
1921	7,903	405.3 (5.1%)
1922	9,306	381.7 (4.1%)
1923	12,757	405.7 (3.2%)
1924	16,529	498.2 (3.0%)
1925	21,015	662.5 (3.2%)
1926	21,175	
1927	15,632	1215.5 (7.8%)
1928	14,559	1018.4 (7.0%)
1929	14,889	1099.6 (7.4%)

（出所）1918-22年のイタリア絹織物輸出額 : 'Exportations des Soies et des Soieries d'Italie', *Bulletion des Soies et des Soieries*, N.2239 (Avril 1920), p.8,; N.2376 (9 Déc. 1922), p.4,; N.2429 (15 Déc. 1923), p.7. 1921年のイタリア輸出額:Department of Overseas, *Report on the Commercial, Industrial and Economic Situation in Italy, December 1922*, London : His Majesty's stationery office,1923, p.22. 1922年イタリア輸出額データ:「伊太利絹業概況」外務省通商局『日刊海外商報』第430号, 1926年3月22日（復刻 ：不二出版2005年, 486-487頁）。;1923-29年のイタリア輸出額データ: Department of Overseas, *Economic Condition in Italy, Dated April 1930,* London : His Majesty's stationery office,1930, p.26. ; 1927-29年絹織物輸出額 : Banca Commerciale Italiana, *Movimento Economico dell'Italia raccolta di notizie statistiche per l'anno 1929*, Milano, 1930, p. 565.

注1）絹織物は人絹織物も含む。空欄の数値は不明。

注2）括弧内は輸出額中に占める絹織物製品の割合。

表2

1917,1923年イタリア国内とコモ県織物業における各部門数の比較

（数）

	コモ		イタリア	
部門	1923	1917	1923	1917
繰返しと整経	105	102	163	156
織物	102	95	162	150
仕上げ	20	12	29	19
染色	8	4	14	10
合計	235	213	368	335

（出所）Monica Taborelli, ‘Appendice statistica e documentaria’ , Zaninelli (a cura di), IV Continuità tra grande guerra e “Miracolo economico” Tomo II, *Da un sistema agricolo a un sistema industriale*, Como : Camera di Commercio, Industria e Agricoltura di Como, 2004, p. 244より作成。

表3

1917, 1923年のイタリアとコモ県の設置織機別工場数と家内工業の数の比較

（数）

	1917		1923	
工場	コモ	イタリア	コモ	イタリア
力織機のみ	48	67	67	93
力織機・手動織機	15	115	21	41
手動織機のみ	32	50	14	27
家内工業				
力織機のみ	2	2	2	2
力織機・手動織機	3	3	1	1
手動織機のみ	17	26	24	29
合計	117	263	129	193

（出所）Annamaria Galli, 'Il sistema produttivo e finanziario', *Da un sistema agricolo a un sistema industriale,* IV, Tomo I, S. Zaninelli (a cura di), Como : Camera di Commercio, Industria e Agricoltura di Como, 1998, p. 272.

表4

1923-26年イタリアの人絹糸輸入先国と輸入量

（単位 ： t）

国名	1923	1924	1925	1926
ベルギー	431.7	382.9	399.3	226.4
フランス	3.4	11.6	11.6	18.0
ドイツ	5.4	27.4	14.3	9.0
イギリス（アイルランド）	0.6	47.9	22.7	5.0
スイス	3.3	75.7	119.7	134.8
その他	64.1	61.9	15.6	40.0
合計	508.5	607.4	583.2	433.2

（出所） *The artificial-silk industry,* Geneva : League of Nations, May 1927, p. 26.
（注） 1926年は1-6月の数値。

表9

1923-29年イタリアの絹製品輸出量･輸出額

	1923			1924			1925			1926		1927			1928			1929 (1,000kg)	1929 (百万リラ)	
項目	輸出量	輸出額	重量単価	輸出量	輸出額	重量単価	輸出量	輸出額	重量単価	輸出量	輸出額	輸出量	輸出額	重量単価	輸出量	輸出額	重量単価	輸出量	輸出額	重量単価
絹織物	616.5	208.8	0.34	763.2	229.8	0.30	918.2	255.8	0.28	985.1		1,126.2	291.5	0.26	1,280.1	270.4	0.21	1,980.5	319.3	0.16
絹または人絹を含む交織物																				
12%以上50%未満							1,609.1			2,844.3		4,262.0	591.7	0.14	6,056.1	495.4	0.08	6,242.9	402.0	0.06
6%以上12%未満							484			508.9		590.7	61.8	0.10	488.4	39.6	0.08	607.3	38.2	0.06
チュール･クレープ		101.6			134.6		521.9	213.4	0.41	516.5		484.5	190.3	0.39	374.0	128.9	0.34	862.9	206.2	0.24
飾り紐･リボン							38.2			43.3		37.1	5.1	0.14	25.5	2.9	0.11	48.2	5.0	0.10
ニット･靴下							80.3			76.6		104.5	12.6	0.12	209.7	19.2	0.09	385.2	33.7	0.09
ビロード							37.3			51.7		38.1	6.5	0.17	52.0	7.5	0.14	109.4	15.1	0.14
その他の製品							295.7			384.2		462.3	56.0	0.12	496.4	54.5	0.11	930.7	80.1	0.09
輸出量合計	616.5			763.2			3,984			5,410.6		7,105.4	1,215.5		8,982.2	1,018.4		11,167.1	1,099.6	

（出所）Banca Commerciale Italiana, *Movimento Economico dell'Italia raccolta di notizie statistiche per l'anno 1929*, Milano, 1930, p.565.
1923-25年輸出額, 1923-24年輸出量データ: Department of Overseas Trade, *Report on the commercial, industrial and economic situation in Italy, Dated December 1925*, London : His Majesty's stationery office, 1926 p. 108.
（注）空欄は不明。

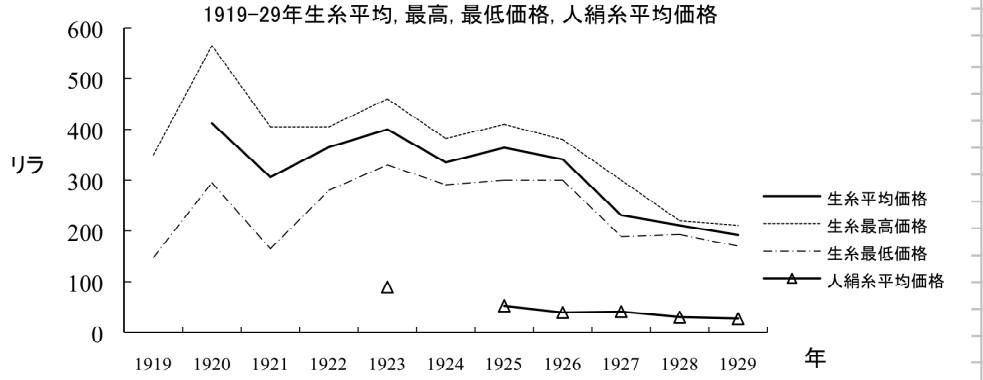
表6

1923-29年イタリア絹織物主要輸出国別輸出量

輸出量				(1000kg)
純絹織物	1923	1925	1927	1929(1-11月)
ベルギー	22.1	18.6	13.8	21.9
フランス	79.6	98.4	52.0	63.1
イギリス	368.2	449.9	341.2	377.0
スイス	34.8	67.1	113.4	103.2
エジプト	16.5	55.7	72.4	185.0
アルゼンチン	28.7	31.7	46.8	64.4
アメリカ	23.0	28.7	69.5	93.3
カナダ	(a)	4.0	19.7	22.7
英領インド	(a)	13.0	91.4	130.9
蘭領東インド	(a)	9.1	78.1	230.9
オーストラリア	(a)	4.3	36.2	46.1
その他	43.6	137.7	191.7	450.5
合計	616.5	918.2	1126.2	1789.0
				(1000kg)
交織物	1923	1925	1927	1929(1-11月)
フランス	(b)	35.0	22.6	61.4
イギリス	224.9	293.9	321.3	229.5
スイス	10.9	15.0	33.6	25.5
英領インド	139.8	283.6	847.5	713.1
蘭領東インド	88.4	279.4	796.7	603.5
メソポタミア	(b)	40.8	115.5	424.8
エジプト	114.2	380.7	699.1	1180.5
モロッコ	(b)	27.2	77.1	501.4
アルゼンチン	49.4	94.2	448.5	643.0
ブラジル	(b)	3.9	25.4	58.0
アメリカ	24.8	55.1	200.1	313.9
その他	219.7	584.0	1256.3	1412.0
合計	872.1	2092.8	4843.7	6546.0

（出所）Banca Commerciale Italiana, *Movimento Economico*,pp.565-566より作成。
(a)その他に含まれたデータ。
(b)織物に含まれ，単独で示されていない。
（注1）交織物のその他には，オーストリア，ギリシャ，ルーマニア，トルコ，中国，タイが含まれる。
（注2)チュール･クレープは含まない。
（注3)メソポタミアの名称は通称で，当時のイギリス委任統治領で現在のイラクに当たる地域。

図1



（出所）生糸平均価格 : 1920年, Natural silk industry, Geneva : League of Nations, 1927, p.24.1921-29年, Banca Commerciale Italiana, *Movimento Economico*, p.555.
（注1)1920年の生糸平均価格はItalian classicalの相場。
（注2）1921-29年の生糸平均価格は, 輸出用sete greggie gialle classiche 13/26の相場。
生糸最高, 最低価格 : Ente Nazionale Serico, *Annuario serico 1931*, Milano : Tipografia Fratelli Lanzani S.A., 1932, p. 32.
（注3）1921年から1928年まで生糸sublime 10/12の相場を利用し, 1929年からclassica 13/15の相場に置き換えられている。
人絹糸価格 : 1923年, Memoria Difensiva per le Unioni Industriali Fasciste delle Provincie di Como, Varese e Milano, 10 giugno 1933, ASC Prefettura Gabinetto, c. 109, pp.12-13より, 1925-29年, Banca Commerciale Italiana, Movimento Economico dell'Italia raccolta di notizie statistiche per l'anno 1929, Milano, 1930, p.573.
（注4）1923年の人絹糸価格の番手は不明。1925-29年人絹糸140/170の相場。空欄は数値不明.。

[1]マクロ的な視点を持ち合わせた近年のイタリア経済史研究は, フェノアルテア (Stefano Fenoaltea), トニオロ(Gianni Toniolo), フェデリーコ (Giovanni Federico, *An economic history of the silk industry, 1830-1930*, Cambridge etc. : Cambridge University Press, 1997), ザマーニ (Vera Zamani) , サペッリ (Giulio Sapelli, *Storia economica dell'Italia contemporanea,* Milano : Bruno Mondadori, 1997,; Toniolo e Vincenzo (a cura di), *Il declino economico dell'Italia,* Milano : Bruno Mondadori, 2004) らにより, 戦間期前後のイタリア経済の再評価がなされつつある。産業史研究ではアマトーリ, コッリ(Amatori=Colli, *Impresa e industria in Italia*, Venezia : Marsilio, 2003), ロマーノ(Roberto Romano, *Fabbriche, Operai, Ingegneri*, Milano : FrancoAngeli, 2000), ザニネッリ(Sergio Zaninelli), コーヴァ(Alberto Cova)らがいる。戦間期の経済史研究サーベイを行った丸山優 (ファシズム研究会編『戦士の革命・ 生産者の国家』太陽出版,

1985), 戦間期の金融史と産業復興公社について研究を行っている伊藤カンナ (「大不況期イタリアにおける産業救済」『土地制度史学』第 172 号, 2001)らがいる。

[2]「1919 年度里昂絹織物工業状況」外務省通商局『通商公報』第 828 号 (大正 10 年 4 月 28 日), 419-425 頁。

[3] *Annuario statistico italiano, 1922-25,* Bishops Stortford : Chadwyck-Healey , 1975, p.280.

[4] Eugenia Paulicelli, *Fashion under Fascism*, Oxford etc.: Berg, 2004, p.47.

[5] Annamaria Galli, 'Il sistema produttivo e finanziario', Sergio Zaninelli, (a cura di), *Da un sistema agricolo a un sistema industriale*, IV Tomo I, Como : Camera di Commercio, Industria e Agricoltura di Como, 1998, p. 233.

[6]トニオロは, この時期の成長の要因として, a)弾力的な労働力の供給, b)生産部門に向けられた投資を保証する資本市場と金融政策, c)適正な関税改革と為替相場によって支えられた海外需要を挙げている (トニオロ, G., （浅井良夫・C. モルテーニ訳）『イタリア・ファシズム経済』名古屋大学出版会, 1993, 28 頁)。

[7]Department of Overseas Trade, *Report on the Commercial, Industrial and Economic Situation in Italy, December 1922*, London : His Majesty's Stationary Office, 1923, pp. 23-24.

[8]絹織物の輸出データについて, コモから直接輸出されたデータが連続して存在していないという資料的な制約がある。

[9]本稿でコモ地方というのは, 旧コモ県にあたる現在のレッコ県 (1992 年コモから分離), ヴァレーゼ県の一部 (1927 年コモ県から分離した旧ヴァレーゼ郡に当たる)を含めた地域を指すものとする。コモ地方は 1861 年の統一以前, オーストリア領ロンバルディア-ヴェネトに属した。オーストリア領時代にマリア・テレジアは養蚕と桑畑を奨励し, 特に桑畑と養蚕農家の拡大に努め絹産業に力を入れた (Vera Zamani, *The Economic history of Italy 1860-1990*, Oxford : Clarendon, 2003, pp. 17-18)。

[10]Stefano Fenoaltea, 'Peeking Backward: Regional Aspects of Industrial Growth in Post-Unification Italy', *the Journal of Economic History* vol.63, no. 4 (Dec. 2003), pp. 1088-1091.

[11]Stefano Fenoaltea, 'Textile production in Italy's regions, 1861-1913', *Rivista di Storia Economica*, vol.20, no.2 (August 2004), pp.145-175.

[12] 農商務省商工局臨時報告『伊仏絹業視察報告』, 明治 34 年第 6 冊, 262-263 頁。

[13]Monica Taborelli, 'Appendice statistica e documentaria' , Sergio Zaninelli (a cura di), *Da un sistema agricolo a un sistema industriale*, IV Tomo II, Como : Camera di Commercio, Industria e Agricoltura di Como, 2004, p. 244.

[14]Taborelli,'Appendice statistica e documentaria', pp. 217, 228, 233-234.

[15]Cohen and Federico, *The Growth of the Italian Economy 1820-1960*, Cambridge etc. : Cambridge University Press, 2001, p. 64. 交渉はコモで始まり, 織布 1kg につき 2.5-7 フランの従量税が課された ('Entrevue a Come des fabbricans de soieries Italiens et Français', *Bulletin des soies et des soieries*, N. 2296 (Mai 1921), pp. 5-6; 'L'accord franco-italien pour les soieries', N. 2413 (Août 1923), pp.3-4。

[16]*Annuaire statistique de la France 1921*, pp.290-291; *1925,* p.228.

[17]輸出主体となったイギリスの商社の正体が判然としないのが現状である。管見によれば, 人絹と綿の交織物を大量生産していたコモの絹織物大企業 FISAC 社が 1926 年にロンドンに支店をおき, ロンドンの代理店を利用した。(Archivio Storico Intesa Sampaolo, BCI, *Relazione di Fabbriche Italiane Seterie A. Clerici*, 30 Settembre,1926) そこでイギリスの商社との取引が行われ, 輸出経路になったと推測される。当該企業について, 別稿で改めて触れる。

[18]Banca Commerciale Italiana, *Movimento Economico dell'Italia raccolta di notizie statistiche per l'anno 1929*, Vol.XIX , Milano, 1930, p. 565.
[19]イタリア絹産業について主にイタリア国内の研究に関するサーベイ論文, Claudio Zanier, 'Current historical research into the silk industry in Italy', *Textile History*, vol. 25, no.1, 1994, pp.61-78 の中で, 特に絹撚糸業について大まかな研究の流れを把握することができる。セヴェリン (Severin)はコモの絹織物業と絹関連産業を中心に, 輸送に関するロンバルディア州, 隣接するスイスのカントン・ティチーノを含むイタリア統一前史を加え, コモの産業教育と生糸倉庫検査所の導入過程など, 1950-1980 年代に包括的な視点による多数の研究を行った。これらの研究の大半は主に 19 世紀に焦点をおき, 網羅的, 通史的で, 20 世紀初頭の発展を強調し, 戦間期以降については概観するのみにとどまっている。Dante Severin, *Origini e Vicende del "Setificio" Comasco 1866-1960, Raccolta di Saggi e Ricerche 10,* Como : Camera di Commercio di Como, 1961.; Severin, *Lo stabilimento comasco per la stagionatura e l'assaggio delle sete 1854-1954*, Miglio (a cura di), *Raccolta di Saggi e Ricerche 2*, Como : Camera di Commercio di Como, 1955 などが挙げられる。
[20]日本貿易研究所訳『生絲』(栗田書店) , 1943, 86-87 頁 (Eva Flügge, *Rohseide, Wandlungn in der Erzeugung und Verwendung der Rohseide nach dem Weltkrieg*, Bibliographisches Institut AG., 1936, S. 64-65 の翻訳)。
[21]Joseph Schober, *Silk and Silk Industry*, London : Constable & Co.Ltd, 1930, p. 242.
[22]Bruno Caizzi, *Vicende storiche della tessitura serica comasca,* Como : Casa Editrice Noseda, 1952, p.65.
[23]特に 1919-1921 年に関する A・ガッリ(ミラノ聖心カトリック大学)の貢献は大きい。イタリア経済史研究において, 一般にこの期間の記述が非常に少ないためである。
[24]ロザスコ(Eugenio Rosasco, *La trasformazione industriale della Tessitura serica ed i suoi nuovi svolgimenti*, Como : Bari & C., 1924)は 1920 年代前半に, コモにおける絹織物業の発展を強調し, トレメッローニ (Roberto Tremelloni, *L'industria tessile italiana*, Torino : Giulio Einaudi Editore, 1937) は, 統計によってイタリア繊維工業全体の概観を示した。
[25]Rosasco, *La trasformazione industriale*, pp. 29-30. 1921 年以前は関税手数料を基に商品評価額を推計した数値を利用していた。
[26]Galli, 'Il sistema produttivo e finanziario', p. 233.
[27] 具体的に, 奢侈品である織物製造への課税, 付加税, 印紙税, 奢侈品販売税などがある。1922 年 3 月コモ商工会議所は, 製造税と付加税の廃止, それ以外の煩雑な税を一本化することを政府に求めた (Matteo Gianoncelli, *La camera di commercio di Como, Raccolta di saggi e ricerche 11*, Como : Camera di Commercio di Como, 1963, pp.105-106)。
[28]Galli, 'Il sistema produttivo e finanziario', p. 262.
[29]Vera Zamagni, '"Interlocking directorates" in Lombardia 1911-1936: primi risultati da una nuova banca dati', Raffaello Ceschi e Giovanni Vigo (a cura di), *Tra Lombardia e Ticino*, Bellinzona: Edizioni Casagrande, 1995, p. 377.
[30]トニオロ『イタリア・ファシズム経済』, 34 頁。
[31]Tremelloni, *L'industria tessile italiana*, p. 201.
[32]Zamagni, '"Interlocking directorates" in Lombardia 1911-1936', pp. 386-387.
[33]Tremelloni, *L'industria tessile italiana*, p. 201.
[34]'Textile Conditions in Italy', *The Textile Recorder*, vol. 39, no. 465 (Dec. 1921), p. 65.
[35]'Textile Conditions in Italy', *The Textile Recorder*, vol. 39, no. 468 (Mar. 1922), p. 69.
[36]ロンバルディア州の銀行は, 地方銀行も含め, 1905 年頃から融資する企業に役員派遣を行

い, 経営指導を行った(Vera Zamagni, '"Interlocking directorates" in Lombardia 1911-1936', pp.378-379)。
[37]Galli, 'Il sistema produttivo e finanziario', p. 215.
[38]ネクタイ生地製造に需要があった ('The Italian Silk Industry', *Silk*, vol. 17 (July 1924) p. 40)。
[39]Luigi De Rosa (a cura di), *Storia dell'industria elettrica in Italia 2. Il potenziamento tecnico e finanziario. 1914-1925*, Roma-Bari: Editori Laterza, 1993, pp. 752, 797, 857. ロンバルディア州の電力消費は 1919-20 年 10 億 6260 万キロワットから 1924-25 年 26 億 2530 万キロワットに増加した。
[40]Taborelli, 'Appendice statistica e documentaria', p. 234.
[41]Museo didattico della Seta, *Como Città di mestiere*, Como : Editrice Cesare Nani, 2000, pp. 61-63.
[42]Museo didattico della Seta, *Como Città di mestiere,* p. 63.
[43]'la lettera alla Camera di Commercio', Archivio n. 21, ASC, FCCC, c. 408.
[44]Galli, 'Il sistema produttivo e finanziario', p. 262.
[45]Museo didattico della Seta, *Como Città di mestiere,* p. 63.
[46]電圧の単位ボルトは, Alessandro Volta に由来する。
[47]'L'augurazione della Mostra Nazione Serica a Como', *Bollettino di Sericoltura*, N. 23 (Giugno 1927), p.372.
[48]外務省通商局『通商公報』第 692 号 (大正 9 年 1 月 22 日), 209-210 頁。
[49]Renata Martano, 'La Banca d'Italia e i provvedimenti a favore dell'industria serica tra il 1918 e il 1922, nelle carte dell'Archivio della Banca d'Italia', *Quaderni dell'Ufficio Ricerche Storiche*, Banca d'Italia, N.3 (Giugno 2001), p. 36.
[50]Alberto Cova, 'Il sistema produttivo e le sue dinamiche', Sergio Zaninelli (a cura di), *Storia dell'Industria Lombarda,* 1992, Milano : Edizioni il Polifilo, p. 69.
[51]Ente Nazionale Serico, *Annuario Serico 1931*, Milano , 1932, p.48.
[52]人絹糸工業側の戦略および動きについては, Confalonieri, *Banche miste e grande industria in Italia 1914-1933*, Vol.II, 第二章 Imprese nuove in un settore nuovo: Châtillon e S.N.I.A. Viscosa を参照のこと。
[53]'Italian Artificial Silk', *The Textile Recorder*, vol. 41 no. 491 (Feb. 1924), p. 93.
[54]Department of Overseas Trade, *Report on the Commercial. December 1922*, 1923, p.30.
[55]Confalonieri, *Banche miste e grande industria in Italia 1914-1933*, p.170.
[56]Bruno Caizzi, *Storia del setificio*, *Raccolta di saggi e ricerche 5*, Como : Camera di Commercio di Como, 1957, p.93.
[57] 「伊太利人造絹糸工業」外務省通商局『日刊海外商報』第 733 号 (昭和 2 年 2 月 2 日), 155-156 頁。
[58]'The Italian Rayon Industry', *Silk Journal and Rayon World*, (Dec. 1929), pp. 63-64.
[59]「世界人絹業の現状と将来」『時事新報』大正 15 年 8 月 27 日, 神戸大学新聞記事文庫, 繊維工業(03-005)。
[60]'Memoria Difensiva per le unioni industriali fasciste delle province di Como, Varese, Milano', ASC., Prefettura-Gabinetto, Primo versamento, c.109, p.12.
[61]Galli, 'Il sistema produttivo e finanziario', p. 282.
[62]Galli, 'Il sistema produttivo e finanziario', p. 282.
[63]'Progress in Italian Textile Industries during 1924', *Textile Recorder*, vol. 42 no.502 (Jan. 1925), p.70.
[64]「伊太利絹業概況」外務省通商局『日刊海外商報』第 430 号 (大正 15 年 3 月 22 日), 486-487 頁。

[65]山崎広明『日本化繊産業発達史論』東京大学出版会, 1975 年, 301 頁。
[66]Banca Commerciale Italiana, *Movimento Economico*, p.575.
[67]Tremelloni, *L'industria tessile italiana*, 1937, p.198.
[68]Ente Nazionale Serico, *Annuario Serico 1931*, Milano : Fratelli Lanzani S. A., 1932, p.42.
[69]Dante Severin, *Storia dell'industria serica comasca, (XVIII-XX sec.)*, Como, 1960, p. 77.
[70]Marco Lorenzini (a cura di), *Comense 1872 Ticosa 1980*, Como : Filó, 1994, pp.54-55.
[71]'Rapporti tra industriali tessitori e tintori serici', *Bollettino di Sericoltura* , N.5 (Feb. 1928), p.65.
[72]Galli, 'Il sistema produttivo e finanziario', p. 276.
[73]政府は輸出向け高級絹織物の製造と販売それぞれに 10%の奢侈税を課した。この税は, 一時的に製品を染色のため輸出するときも適用され, 絹織物業者にとって非常に重い負担となった 。('Imposta di fabbricazione sui tessuti di lusso', 21 giugno 1921, Archivio N.21, ASC, c. 408.) 輸出奢侈税は 1920 年 8 月 23 日政令 11755 号で定められた。
[74]Sofia Gnoli, *La Donna L'eleganza Il Fascismo*, Roma : Arti Grafiche La Moderna, 2000, pp.25-26. デ・リグオーロは 1919 年 5 月に "Lidel"という雑誌を創刊し, 芸術的なデザイナーを奨励し, イタリア女性にイタリアのデザインを尊重させようと活動した。
[75] 'Importations des Soies et des Soieries d'Italie', *Bulletion des Soies et des Soieries*, N.2291 (23 Avril 1921), Lyon, p.13.
[76]Rosasco, *La trasformazione industriale*, pp. 29-33.
[77]'Le importazioni e le esportazioni seriche italiane', *Bollettino di Sericoltura*, N.9 (Marzo 1928), p.122.
[78]Museo didattico della Seta, *Como città di mestiere,* p.25-31.グイード・ラヴァージ (Guido Ravasi)は, ミラノに生まれ, スイスで専門学校に通い, クレフェルト, ウィーンで織物を学び, コモで店を構えた。
[79]Galli, 'Il sistema produttivo e finanziario', p. 276. 本稿で産業教育に触れることはできないが, 専門学校と国が流行発信の企画を行い, 1930 年代に政府がモード公社 (Ente Nazionale della Moda) を本格的に推進した(Gnoli, *La Donna L'eleganza Il Fascismo*, 2000 の第四章 L'ente nazionale della moda e l'autarchia della moda を参照)。
[80]Gnoli, *La Donna L'eleganza Il Fascismo*, p.31.
[81]Bruno Caizzi, *Storia del setificio comasco*, p. 98.
[82]Rosasco, *La trasformazione industriale*, pp. 44-45.
[83]Galli, 'Il sistema produttivo e finanziario', p. 274.
[84]Galli, 'Il sistema produttivo e finanziario', p. 274.
[85]'The Italian Silk Goods Industry', *The Silk Journal*, (Mar. 1927), p. 49.
[86]交織ビロード輸入は, 1922 年 1,1477,816 リラ, 1925 年 6,245,300 リラ, 1926 年 5,355,600 リラ, 輸出は 1922 年 2,833,307 リラ, 1925 年 6,665,900 リラ, 1926 年に最大の 9,346,300 リラに達した。 ('Importations des Soies et des Soieries d'Italie', *Bulletin des Soies et des Soieries*, N.2429 (Déc. 1923), p.7, ; N.2430 (Déc.1923), p.7,; N.2573 (18 Sep. 1926), p.7)。
[87]'The Italian Silk Goods Industry', *The Silk Journal* (Mar. 1927), p. 49.
[88]Galli, 'Il sistema produttivo e finanziario', p. 274.
[89]'Some Historic Notes on the French and Italian Umbrella Industry', *Silk* (May 1926), p. 39.
[90]'The Italian Silk Goods Industry', *The Silk Journal* (Mar. 1927), pp. 48-50.
[91]Galli, 'Il sistema produttivo e finanziario', pp. 316-317.
[92]トニオロ『イタリア・ファシズム経済』, 59-91 頁。
[93]*Annuario statistico italiano,* 各年。
[94]Galli, 'Il sistema produttivo e finanziario', p. 233.

[95]スペイン向け絹製品輸出を促進する為に，フランで設定されている販売価格をペセタで，表示・支払いが行われ，リラで表示，ペセタで支払い，フランで表示・支払いが可能となった(‘The Italian Silk Industry’, *The Textile Recorder*, vol.38 no.452 (Nov. 1920), p. 73)。
[96]Galli, ‘Il sistema produttivo e finanziario’, p. 233.
[97]Rosasco, *La trasformazione industriale*, p.37. 1870 年代にはミラノ-コモ間で鉄道が敷設され，1880 年代にはコモ-スイス内陸部間の鉄道が開通した。第一次世界大戦中，この輸送経路が利用できず，一時的にジェノヴァ港を利用したが，業者は国内輸送組織の不備などからジェノヴァ港経由を敬遠し，代わりにフランス経由の鉄道が復旧するとそれを利用した。しかしこの経路でも遅延が続き，戦前で一週間とされた輸送が終戦直後には一ヶ月以上かかった (Caizzi, *Storia del setificio comasco*, p. 96,; Galli, ‘Il sistema produttivo e finanziario’, p. 151,; ‘Textile conditions in Italy’, *The Textile Recorder*, vol. 38 (June 1920), p. 71)。
[98]アメリカは絹織物輸入に 55-60%という高額関税 (Fordney Tariff) をかけ，日本，フランス，スイスがアメリカ市場向けの輸出を独占した。1921 年に，リヨンのアメリカ市場への売り込み成功がコモで報告されている (Galli, ‘Il sistema produttivo e finanziario’, p.280)。1921 年リヨンの絹織物業者はアメリカ市場について，シフォンとクレープに対する関税の税率が高すぎること，申告後の原価評定に 3-4 ヶ月かかり，アメリカの同業者が流行の製品の模造品をつくってしまうと指摘した（「仏国絹工業の危機」外務省通商局『通商公報』第 899 号 (大正 10 年 12 月 22 日), 39-40 頁）。
[99]在ニューヨークイタリア商工会議所は，「（イタリアの絹織物業者が）アメリカで 1 ヤード数ドルの大衆的な商品を販売し，アメリカの基準にあった織物で競合することは難しい。高級絹織物製品で名声を得，優れた仕事と品質を評価する顧客の注文を受ける方が得策」とコメントした (Galli, ‘Il sistema produttivo e finanziario’, p. 280)。
[100]1921-24 年の平均でみたアメリカ向け広幅絹織物輸出国と額は，日本 (1323.6 万ドル)，フランス (218.4 万ドル)に対して，イタリア (28.4 万ドル)は取るに足らないものであった (‘Value of Imports of Broad-silks into the U.S., by Countries’, *Silk* (Feb. 1929), p.71)。
[101]‘Italian Silk Manufactures’, *The Textile Recorder*, vol. 41 no. 485 (Aug. 1923), p.106.
[102]Rosasco, *La trasformazione industriale*, p. 29.
[103]カズナーティ社は国内販路を持たずイギリス向け絹織物輸出が主だった。イギリス市場への輸出を維持するため, 8000 万リラの製品をわずか 4000 万リラで販売したように，赤字は 2300 万リラに達した。支払いのために外貨が必要で，生産コスト以下の注文を受けねばならなかった。経営者のバジリオ・カズナーティは 1926 年 11 月頃の報告で，「この時期の為替レートは 1 ポンド=112 リラであったが，低価格で販売を続けていたため，利益を得るには 1 ポンド=140 リラであることが必要である」と為替の変動に悩んでいることを，ロンドンから綴った (Galli, ‘Il sistema produttivo e finanziario’, p. 321)。
[104]トニオロ『イタリア・ファシズム経済』, 89 頁。
[105]Department of Overseas Trade, *Report of the commercial, industrial and economic situation in Italy, Dated December 1925*, London : His Majesty’s stationery office, 1926, pp.42-43.
[106]Cova,‘Il sistema produttivo e le sue dinamiche’, pp. 92-93.
[107]1925-26 年のフランスの絹織物輸出は，イギリスとドイツ向けが減少し，代わりにオランダ，チェコスロバキア，アメリカ，アルゼンチン，カナダ，モロッコ，インドシナ向け輸出が非常に増加した。1926 年の新規輸出先としてポーランド，ポルトガル，ユーゴスラビアがあり，リヨンの製品は人気であった (‘French Exports of Silk Goods’, *Silk* (Oct. 1926), p.41)。
[108]Department of Overseas Trade*, Report of the commercial. Dated Dec.1925*, p. 108.

[109]Galli, 'Il sistema produttivo e finanziario', p.312. フィウメ問題に端を発する運動であると考えられる。
[110]'The Italian Silk Goods Industry', *The Silk Journal* (Mar. 1927), p. 48.
[111]勅令第 80 号「輸出奨励機関設置」,「南阿行伊太利商品見本陳列船」外務省通商局『日刊海外商報』第 600 号, 第 713 号, 大正 15 年 9 月 11 日, 768 頁, 昭和 2 年 1 月 13 日, 1332 頁。
[112]Ente Nazionale Serico, *Annuario Serico 1939*, Milano : Alga, 1939, pp. 62-64.
[113]アメリカにおけるイタリアの絹織物売上額(1-5 月末の間の売上額比較)は, 純絹織物 1926 年約 9607 万 7 リラ, 1927 年約 1 億 760 万リラ, 絹交織物 1926 年約 8402 万リラ, 1927 年約 2 億 3881 万リラであった。アメリカ向け輸出は, 依然全ての絹製品に高関税が賦課され, 1926-27 年の輸出は限定的であるものの, その中で輸出を伸ばしたのは交織物で, 次に純絹織物製品, ビロード製品は大幅に減少し, 高級製品に限られた ('Imports and Exports of Italian Silks from January 1st to May 31st', *Silk* (Aug. 1927), p.71)。
[114]フランス向け輸出は, 為替相場変動のため需要が不安定であった。ベルギー向け輸出は多品目にわたり, 特にクレープ・デ・シンとジョーゼットが主であった。絹製品取引が少ないオーストリア, チェコ, ポーランド, ユーゴスラビア, ハンガリー, ルーマニアは, 関税障壁が低くなった場合, 取引は改善すると 1927 年時点では考えられていた。1927 年までイタリアと取引がほとんどなかったスウェーデン, ノルウェー, デンマークなど北欧についても, これらの市場の発展が非常に期待された。ロシア向け絹織物製品の輸出は依然不可能であった ('The Italian Silk Goods Industry', *The Silk journal* (Mar. 1927) p. 49)。カナダ向け輸出製品は, 主に低級品の絹織物と純絹ネクタイ生地であり, 圧倒的に, 日本, フランス, スイス, アメリカが占めた('Situazione Serica Mondiale', *Bollettino di Sericoltura*, N.6 (Feb. 1927), p. 91)。
[115]'The Italian Silk Goods Industry', *The Silk journal* (Mar. 1927), p. 49.
[116]商工省貿易局『繊維工業品輸出状況調査』昭和 7 年 7 月, 152 頁。
[117]'The Italian Silk Goods Industry', *The Silk journal*, (Mar. 1927) p. 49.
[118]'The Italian Rayon Industry', *Silk Journal and Rayon World* (Dec. 1929) p. 63.
[119]'Missione Italiana di studio in Grecia e in Turchia', *Bollettino di Sericoltura*, N. 34 (Ago. 1928) p.465.
[120]'L'importanza della partecipazione italiana alla Esposizione di Barcellona', *Bollettino di Sericoltura*, N.43 (Ott. 1928), p.567.
[121]商工省商務局『本邦輸出綿織物の現勢』日本輸出綿織物同業組合連合会, 昭和 4 年, 1360 頁。
[122]輸送状況の改善で, アメリカ向け輸出はスイスあるいはナポリ経由で行われた。また, スイスとドイツの鉄道がイタリアとスイスの国境キアッソからベルギーのゼーブルッヘ港まで直通電車を走らせ, コモからイギリスまで 48 時間で輸送が可能となった ('Comunicazioni e Trasporti', 'Trasporti diretti di merci destinate all'Inghilterra', *Bollettino di Sericoltura*, N.10 (Mar. 1927),p.153, ; N. 17 (Apr. 1927), p.268)。

【abstract】

The Expansion of Silk Textile Export in Northern Italy, 1919-1929

Makiko Hino
Graduate School of Economics at Osaka University

The purpose of this article is to examine the expansion and the aspect of silk textile export in Northern Italy, especially in Como district, during the period of 1919-1929, when the Italian silk textile industry gained an international competitive advantage. The author would like to propound some views to which little attention has been given.

Generally speaking, the modernization of management organization in the early 1920's accelerated the development of silk textile industry. Firstly, the textile machine industry concurrently came to grow, which made it possible to improve the quality of textiles and helped for the silk industry to acquire the new markets for its goods. Secondly, the increasing use of artificial silk from the early 1920's drastically changed the situation around silk textile. Thirdly, the silk textiles with the new additional raw material came to be woven under the mass production system. Fourthly, the silk textile industry tried to improve the design of silk textiles for couture, and succeeded in reaching the forefront of Italian fashion, cooperated with the government. All of the above-mentioned facts did start when the British government imposed tariff barriers on the silk textile. At that time, Italy had no choice but to develop overseas market. In the second half of the 1920s, capturing the new markets of Asia, Africa and South America, the export of silk textiles including artificial silk as new mass products remarkably increased.

JEL classification: N60, N64, N94
Key words: Italian Economic History, Silk textile industry, Export, Market, Fashion

† Graduate School of Economics, Osaka University, Machikaneyama-machi, Toyonaka, Osaka, Japan
E-mail: dg019hm@mail2.econ.osaka-u.ac.jp